

研究ノート

コミュニケーションの本質が分かれば 誰しも英語を話すことができる：

日本人が国際語として英語を話すために必要なこと

¹若本夏美 ²村瀬学

¹同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

²同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・名誉教授

The essence of communicating in English:

What Japanese people need to know to use English as a global lingua franca

¹WAKAMOTO Natsumi ²MURASE Manabu

¹Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor Emeritus

1. 小学校からの英語教育の背景

2020年4月から小学校に教科として英語が導入される（文部科学省、2017）。この導入の是非についてはいろいろな議論がある（例、鳥飼、2018など）が、導入の背景には現在の小学校5年生からの外国語活動、中学校からの本格的な英語教育のスタートでは遅すぎるという漠然としたいらだちがあるように思える。各種調査においても日本人英語学習者の英語達成度は依然として低いままでありそのいらだちを後押しするかのようである¹⁾。英語が苦手だという日本人は多く、その大半は「もっと早くからはじめていたら英語をスラスラと話せたのに」というルサンチマン（恨み；平泉・渡部、1975）にこの臨界期説（the Critical Period Hypothesis, Brown 2014）は巧みな説得力を持っている。

しかし、臨界期を過ぎたと言われる思春期（Puberty, 12-14歳）に英語学習をはじめることが本当にこの問題の原因なのだろうか。一般的な印象としてある「語学の学習は早ければ早いほどよい」という説は、科学的根拠に基づかない俗説の域を出るものではない、というのが第二言語習得理論の現時点での見解である（例えば、Lightbown & Spada, 2013参照）。特に「早くから始めればすべての問題が解決する」と考え、学習環境（大クラス）やカリキュラムの編成（週に数回の授業回数）に手を付けないまま見切り発車するところは、文部科学省を典型とする日本型の精緻とは言い難い議論の在り方を示している²⁾。

本稿は、ともすると英語を話すことができない現象の全ての原因を「開始年齢」に押しつけようとする風潮を憂い、異なった観点から日本

の英語教育の問題点を議論しようとするものである。児童文学と応用言語学という異なる分野の研究者が対話を通し、コミュニケーションの本質を明らかにしながら、日本人が自信を持って国際語としての英語を使いこなすための方策を議論し、具体的な提言を呈することを目的としている。

2. Happy Brexit?

世界にある100を超える自然言語の中でも英語は興味深い存在である。英語には、国際語としての役割 (English as a global lingua franca, Rose & Galloway, 2019) を持ちあわせながら、地域語として、いわば言語の祖国として英国 (正式名称は、the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland) を持つ二重構造がある。そのため決定的な影響力を持つわけではないが、数多くの英語教師と教材を世界中に提供する (英語は産業であると英国は豪語している) 英国の動きを無視することもできない。

英国は2020年1月31日をもってEUから離脱したが (いわゆる Brexit)、翌2月2日付、英紙ガーディアンは次のような違法な貼り紙が或るアパートに掲示されたことを報じている³⁾。

Happy Brexit Day.

As we finally have our great country back we feel there is one rule to that needs to be made clear to Winchester Tower residents.

We do not tolerate people speaking other languages than English in the flats.

We are now our own country again and the Queens English is the spoken tongue here. If you do want to speak whatever is the mother

tongue of the country you came from then we suggest you return to that place and return your flat to the council so they can let British people live here and we can return to what was normality before you infected this once great island.

It is a simple choice obey the rule of the majority or leave.

You won't have long till our government will implement rules that will put British first. So, best evolve or leave.

God Save the Queen, her government and all true patriots.

(ブレグジット、おめでとう！とうとう自分の祖国を取り戻したこの機会に、ここの住民にルールをはっきりと示しておきたい。このアパートでは英語以外の言語を話すことを許容しない。再び祖国を取り戻したのだから、クイーンズ・イングリッシュがここでは話されるべきだ。もし君が何語か知らないが自分の祖国の言葉と話したいならこのアパートを引き払いここに住みたいと思っている英国人に部屋を譲り渡すべきだ。祖国に帰り給え。そうすれば君達が汚してしまう前の本来のイギリスに戻すことができるのだ。イギリス人第一主義の方針を英国政府が打ち出すのを待つ必要はない。(クイーンズ・イングリッシュを話すよう) 進化するか去るかいずれかだ。女王陛下万歳！イギリス政府、愛国者万歳！)

日本語に訳すだけで気分を害する文章であり、イギリスでも同様の反応であつたらしい。不当な掲示物であるとして警察に通報されたとのことである。しかし「イギリスにいる限り英語を」

「使うなら美しいクイーンズ・イングリッシュを」という尊大な認識は Brexit を熱烈に支持する英国人だけでなく、少なからず英国一般大衆の本音をあらわしているかもしれない。特に、「使うなら美しい英語を」のくだりは、実はネイティブ・スピーカーと言われる英語を母語とする人達以上に、英語を母語としない人々、特に日本人の心の奥底に根強く息づいているのではないだろうか。別の見方をするなら「美しい」クイーンズ・イングリッシュやネイティブの話す英語以外、すなわち「国際語」としての英語のモデルを我々日本人は知らないのかもしれない。

3. 国際語としての英語と日本の方言

新聞の人生相談に次のような投書がなされた。

山形から上京して30年。今では田舎の友人と話すのも年1、2回程度となり、言葉の「なまり」に以前のような抑揚がつけられません。学生時代の友人たちと昔話をした時も中途半端な共通語となまりを使っていました。後になり、仲の良い友達から「共通語を使いやがって」と陰口を言われていることを注意され、悲しくなりました。近く高校時代の同期生と会います。昔のように自然ななまりが出る方法を教えてください（毎日新聞、2020年1月28日）。

方言と英語、一見、この二つは無関係のようにも思えるが、言語間の関係という意味では興味深い関係性がある。この投稿者の友人は、なぜ共通語を話すようになった友人に違和感をもつようになったのだろうか。またこの友人は、なぜ以前のように方言を話したいと思うようになったのだろうか。方言を表す英語、dialect、これは対話を表す dialogue と同語源(cognate)である。ギリシア語の「～の間、between, across」を表す「dia」と「話す、speak」を表す語幹の「leg」を語源として共有している。すなわち、dialect とは dialogue と同様に「人

の間で会話をする」、というのが本来の意味である。

人が方言を使う理由、それは自身が所属する共同体の中での会話、意思疎通を円滑にするためである。意思疎通は詰まるところ大なり小なり意思のぶつかりあいでもある。意思のぶつかりは、相手を拒否するかしらないか、拒否されるか、されないか、になりがちで、そういう強くなりがち意思を和らげないと、大昔には殺し合いになることすらあっただろう。人が向かい合う時には意思のぶつかりはできるだけ和らげなくてはならないし、相手を傷つけないようにしなければならない。このぶつかり合いを少しでも和らげるために「発明」されたのが「方言」としての話法である。

方言は、意思の断定を和らげる話法とイントネーションを持っている。(たとえば「リンゴがある」というのを京都弁では「リンゴがありまっしゃろ」というように語尾を和らげたりする)。この意思を柔らかくみせる話法とイントネーションを、本稿ではカギ括弧付きの「リズム」と表記して、一般的に使われるリズムと区別しておくが、この方言を話す者同士では、その「リズム」を共有することによって激しい内容でも柔らかい響きを持つように伝達し合う。一方、方言はお隣の共同体とは差異を生むようにして形成されてきているのも特徴である。そういう意味で、方言とは共同体の「リズム」であり、その「リズム」は文化的背景から生まれていると言える。方言がその背景にある文化の「リズム」を象徴していることは言語の本質に通じる点である。言い方を変えるなら、言語が異なることは「リズム」が違うということであり、「リズム」の響きは共同体の内外を区別する機能を持つ(図1)。

言語を学び、使う原初的な目的が円滑なコミュニケーションであるとすれば、その「リズム」を共有することなしにコミュニケーションは成立しないことになる。コミュニケーションの本質とは、「リズム」の確認であり、共同体の「リズム」で話すことが重要となる。先の投稿者は、

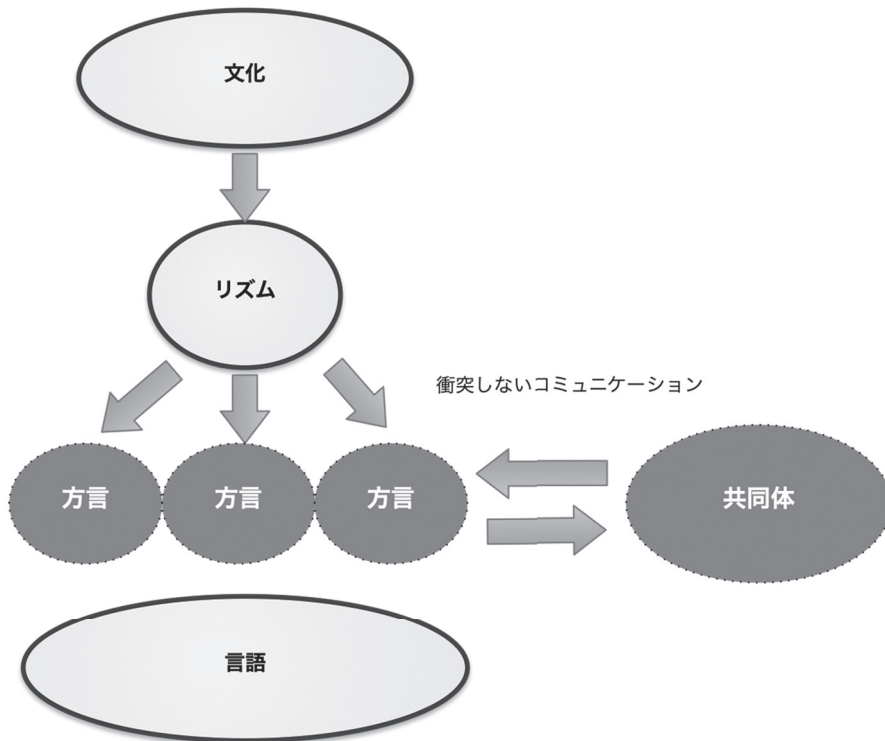


図1. 言語、方言、リズム

言葉と言うよりは言葉の「リズム」が異なるが故に友人に違和感を感じ、昔は同じ共同体にいたにも関わらず、異なる共同体に所属する者と認識されてしまったのである。方言という「リズム」で話すことが、話す内容以上に重要になる訳である。そして異文化コミュニケーションとは、互いの「リズム」の交換を意味することになる。

これは Brexit の貼り紙とも共通するところである。英語を話さない同じアパートの住人に対して、また英語であってもイギリス人の英語＝クイーンズ・イングリッシュではない外国語訛りの英語を話す、異なる「リズム」を持つ人々に対して嫌悪感を持ってしまったわけである。

ただ、先ほどの投稿者の方言と異なり、この点、英語の話者は複雑である。日本語同士の方言であれば以前はその言葉を使っていたわけで

あるし、本来同じ文化を共有していたわけであるから「元に戻る」ことは可能かもしれない。しかし、英語の話者の場合には、英語を母語としない日本人が「いわゆるネイティブのように」話すことに戻ることはあり得ない。その母語話者のような英語が可能か否かという議論となる。

日本人の中にはこの「英語母語話者のように」話すことこそ英語学習の最大のゴールであるとし、例えばイギリス人やアメリカ人のように英語を話せない人を小馬鹿にする風潮がありはしないだろうか。特に、英語教師の中にその風潮があるのではなかろうか。自身よりも英語母語話者に近い人物を崇め、劣っていると思う者を侮蔑する。中高等学校の英語の授業で、こと英語を話すこととなった場合、そういうピラミッド型の差別構造を生み出してしまう。このような認識がある限り、一握りの長期留学や海外経

験の長い人達、帰国子女と言われる特異な経験を持った人達（その多くは本人の能力とは無関係な経済的に恵まれた家庭環境に起因する）のみが英語の達人とされ、国内で英語学習をする圧倒的大多数の日本国民は常に英語に対するコンプレックスに苛まれる存在となってしまう。

2020年から始まる小学校の英語教育が万一このような「母語話者のような英語オーラルコミュニケーション能力」の養成を最終的なゴールとするなら、その結末（高校修了時の英語能力）は現在よりもより悲劇的なものになるだろう。学習指導要領には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」（新小学校学習指導要領、文部科学省、2017）と明記されているものの、モデルとする英語についての具体的な記載はない。日本における英語教育の方針を提示する役割を持つとされる学習指導要領にモデルの提示が無い限り、現在多くの日本人が抱く英語モデル、すなわち「ネイティブ・ライク」の英語がデフォルト（初期設定）のまま変わることはない。

仮に小学校からの教科としての英語の開始が臨界期説（学術的には共通理解を未だ得られていない）に基づくなら、音声の習得に関しては小学校でも遅すぎる。音声の臨界期は更に早く、極端な場合には生後6ヶ月、3才、遅くとも6才までと仮定する説が多い。すると何年か経つと小学校でも遅すぎるので幼稚園から、いや幼稚園に就学する前からと限りなくその開始年齢は早くなったり（現在でも存在するが）英語だけで過ごすイメージ保育園などがその優位性を謳うことになるであろう。

しかしここで冷静になって考えてみると2つの興味深い点が浮かびあがってくる。①日本人が話すべき英語とは日本人が苦手とされる「s/th、l/rの発音の区別」のような個々の発音のことを指すのか、②国際語として英語を使う場合、学校を除けば、会話をする相手は非英語母

語話者である場合が多いのに、ことさらに英語母語話者をモデルとする必要があるのか。

4. リズムと国際語としての英語

英語母語話者のように英語を話す、と聞くと教室で英語教師に厳しく発音を矯正された、しかもクラスメートの前で恥ずかしい思いをした、という辛辣な経験が浮かびあがってくる大人も多いことだろう。しかし、現在の第二言語習得理論の知見においては、発音という場合、個々の発音よりも、長音節（suprasegments）すなわち、リズム、ストレス、イントネーションの方がオーラルコミュニケーション能力としては重要であるとされる（Lightbown & Spada, 2013）。イントネーションには上昇調（rising intonation）や下降調（falling intonation）がある（若本他、2017）。またストレスに関しては、英語は強勢アクセント（stress accent）であるのに対し、日本語はピッチアクセント（pitch accent）をもつ言語であることも知られている（同上）。そしてリズムとは、このイントネーションと強勢アクセントから構成されると考えられる。

イントネーションは未だしも、音の高低でリズムを作ることに慣れた日本人母語話者にとって強勢アクセントに慣れるのは容易ではない。もちろん、逆も同様で、英語母語話者が話す日本語に独特の強勢が入ってしまうことは周知の通りである。今後更なる論考が必要であろうが、私達は日本人が目指すべき「国際語としての英語モデル」を考える際、個々の発音に関しては要点を押さえた適度に習熟する程度の練習に抑え、リズム、特に強勢アクセントに十二分に留意する教育を展開するべきではないかと考えている。特に、小学校からの英語、外国語活動においてはリズム（話法とイントネーション）の指導が重要であると考えている。なぜなら、リズムこそが方言と同様、言語のそして文化的背景のもとに産まれてくるものであり、スムーズなコミュニケーションを可能にする重要な要因であるからである。

コミュニケーションはリズムによって影響される。リズムを、ただ日本語にない英語の音を出すための口・舌の動きに限定指定している人もいるが、そうではない。英語や他言語を学ぶということは、実はその国の言葉の持つ話法やイントネーションとしての「リズム」を学ぶことなのではないだろうか。その「リズム」を学ぶことによってコミュニケーションをしようとする意欲が湧いてくる。「リズム」はダンスでもあり、本来楽しいものであるはずである。ダンスやリズムと聞いて否定的な印象を持つ人はほとんどいないであろう。もちろん、個々の発音を軽視しているわけではないが、それは英語母語話者のような英語を話そうとする教育であり、日本人英語学習者に必要な英語教育ではない。

長期の留学を経験した学習者は英語観が大きく変化して帰国するものが多い。Sasamoto (2019) は長期留学生を対象とした研究の中で、英語学習観、特に英語を話すことについての考え方が変化していることを統計的に示している。海外では多様な文化的背景を持った英語をそれぞれ自信を持って話している姿を目にするからであるという。日本人英語学習者が教室でモデルとするのはCDにしてもALT (Assistant Language Teacher) にしても母語話者の英語であって、非母語話者の英語を聞く機会は極端に少ない。母語話者の英語を目標とする限り、日本人が自信を持って英語を話せるようになる日は永遠に来ないであろう。それは仮に英語学習開始年齢を小学校就学前に前倒しをしたとしても、である。

5. 目指すべき国際語としての英語と小学生に英語を教える際に重要なこと

最後に日本人が目指すべき国際語としての英語に関して具体的な提言をしたい。言語の特にコミュニケーションの本質は「リズム」(話法とイントネーション)であることを方言との関わりで述べてきた。日本語でも多くの優れた詩を発表しているアーサー・ビナード (Arthur

Binard) は日本語をどのように習得したのかを問われ「日本語の波長にあわせるようにしています」(2002年、Personal Communication) と答えている。この波長を合わせるというのは柔らかい言葉遣いであるが、相手の言っている内容を理解しようとしながら知識としてではなく感覚で日本語の「リズム」に同期しようとしていることを示している。「リズム」特に、単語内での強勢(ストレス)や文の中での単語間の強勢(ストレス)を英語を学ぶ際に、殊更注目してみるといいのではないだろうか。このような「リズム」に注目する、「リズム」に乗る、「リズム」を遊ぶというのは小学生に代表される児童期のお得意の活動になると期待される。先生が話している英語の「リズム」をこども達がとらえる。これはいわば、日本で山形弁なり鹿児島弁なり、それぞれの方言の「リズム」を学ぶことと同じである。

しかし、非母語話者同士の英語会話の際にそのような「リズム」が必要なのかという議論はもちろんあるだろう。ただし、母語話者をモデルとしない場合にも、英語の背景にある文化とリズムは国際語としての英語に進化した段階においても完全に消え去ってしまうことはない。むしろ、共通項として英語の「リズム」を全世界の人たちが共有しようとする時になってはじめて、相手を一方的に否定しない(殺し合いのない)、柔らかくスムーズなコミュニケーションが可能となるのではないだろうか。私たちの主張は一言でいうなら、英語の個々の単語の発音やリエゾンといわれる単語間の繋がりではなく、イントネーションと単語内や文の強勢、ストレスを中心とした楽しい「リズム」の習得を小学校英語で、そして日本人が目指すべき国際語としての英語のゴールにするべきであるというものである。意思を柔らかくみせる話法とイントネーションが方言の本質であり、国際語としての英語の核である。なぜなら、世界中の人達が殺し合うことなく、そのために意思を柔らかくしながら共通理解を図るために用いるのが国際語としての条件であるからである。

英語によるコミュニケーションは楽しいはずである。それは日本語を共有している日本人同士の会話においてもそうである。その際に個々の発音の正確性をゴールにし、舌や口の動きばかりを意識させる学習に特化してしまうと、コミュニケーションの楽しみではなく間違いを正される英語の記憶のみが残ってしまうことになる。重要なのはコミュニケーションが成立することであり、そのために必要な音声の特徴は発音がいかに英語母語話者に近いかではなく、英語のリズムを楽しんで話ができるかという点になる。

では具体的にはどのような名案があり得るのだろうか。日本語のリズムと英語のリズムを比較したり交換できるものはないか。しかも、リズムが本来持っている「楽しさ」を実感できるもの。そこで私たちが行き着いたのが「落語」である。落語をまず日本語で、次に英語で（英語のリズムで英語らしく）演じてみる。落語自体が面白いものだから上手くいくとリズムに乗せて楽しく学ぶことが可能となる。

例えば次のようなものはどうだろう。最初に日本語でそして次に英語のリズムで演じてみるのである。落語は日常的なことを取り扱っているから感情をこめてそれぞれの言語のリズムで演じることができるかもしれない。

もなか（一人二役 小学生落語）

太郎君：うちのオカンが わからへんことがあるっていうねん。

Taro: My mom has a problem. She can't remember something.

二郎君：何がわからへんのよ。

Jiro: What?

太郎君：好きなお菓子があるらしいねんけど、そのお菓子の名前をちょっと忘れてらしくてね。

Taro: She forgets the name of a sweet.

二郎君：お菓子の名前忘れてたってどうなってん

ねん、それ。

Jiro: Really? Is she all right?

太郎君：いろいろ聞くねんけど全然わからへんねんな。

Taro: She is impossible!

二郎君：オカンの好きなお菓子の名前、いっしょに考えてあげるから、どんな特徴があるか言ってみてよ。

Jiro: Okay, I will help you for her. Tell me something.

太郎君：和菓子で、薄茶色のパリパリの皮でアンコをはさんだやつやて。

Taro: It's a Japanese sweet. It's light brown, like a sandwich with sweet bean jam.

二郎君：モナカやないかい。その特徴は完全にモナカやがな。

Jiro: Easy! It is Monaka. Mo-na-ka. It must be!

太郎君：それがわからへんねんな。

Taro: But, she is not sure.

二郎君：何がわからへんのよ。

Jiro: What? What do you mean?

太郎君：オレもモナカやと思たんやけど、オカンが言うにはスーパーで子どもがそれ欲しくて泣いてたって言うねんや。

Taro: I also thought so, but it is what kids really love.

二郎君：ほなモナカと違うか。

モナカで子どもごねへんもんね。モナカあんなに甘いくせに子どもからは全く人気がないねんやから。もっと詳しく教えてくれる？

Jiro: Then, it is not Monaka. Kids do not

like Monaka.

太郎君：食べたらずが全部上あごにひつつくらしいねん。

Taro: It is ... when eating, it sticks to the mouth.

二郎君：モナカやないか。あれ全部上あごに持っていかれるねんから、皮とあんこのハーモニー感じたことないのよ。モナカに決まりや、そんなもん。

Jiro: Then, it should be Monaka. Monaka takes all the water in the mouth.

太郎君：わからへんねん。

Taro: But I am not sure.

二郎君：何がわからへんねん。

Jiro: Are you kidding me?

太郎君：俺もモナカと思ったんやけどオカンが言うには1個食べ出したら止まらへん言うねん。

Taro: I also thought it would be Monaka, but my mom can't stop eating once she starts.

二郎君：そんならモナカと違うやないか。モナカは一口食べたらずが止まんのよ。モナカ2個目いってヤツ見たことないんやから。ほなモナカと違うやん。

もうちょっと何か言ってなかったか？

Jiro: Oh no. You can't eat two Monakas in one day. Then, it is not Monaka. Anything else?

太郎君：オカンが言うにはモナカではないと。

Taro: She says it is not Monaka.

二郎くん：ほなモナカではないやないか。

Jiro: Idiot! If she says so, it is not Monaka. Idiot!

太郎君：申し訳ない。

Taro: Sorry. I am sorry.

二郎君：ほんまにわからへんがな。どうなってんねや。

Jiro: We have no idea! Anything else?

太郎君：オトンが言うにはピザポテト違うかと。

Taro: My dad says it is Pizza Potato.

二郎君：絶対違うやろ。

Jiro: They are unbelievable!

このような落語⁴⁾を日本語と英語で演じることでそれぞれの言語のリズム(話法とイントネーション)の違いを学んでいく。ここで重要なのは英語のリズムを理解すると同時に英語との相違から日本語のリズムも理解することである。リズムを理解することを通して、言葉の役割とはまずコミュニケーションを円滑にするためにあるということを理解する。これは単に外国語が鏡として母語を映し出すというだけでなく、言葉自体の役割を認識するところまで高めることができることを意味している。このような活動を進めていく中で英語だけでなく日本語で話すことにも興味湧いてくるのではないだろうか。そして決して英語の方が日本語よりも優れているわけではなく、言語に優劣があるわけではないことも実感できるようになることが期待される。日本各地にはそれぞれの方言がある。ひいては、英語を通して子ども達の住んでいる地域の方言にも理解を及ぼすことができるようになるのではないだろうか。

国際語としての英語とはもっとわかりやすく、いいと思う。英語を学び始めたころにカーペンターズの歌を聴いて、メロディーの美しさ以上にわかりやすい英語に感動した覚えがある人達は多いだろう。言い換えるとマネのしやすい英語こそが国際語としての英語の実像なのではないだろうか。リズムは楽しくマネもしやすい。リズムで遊びながら、英語の波長に乗りながら

わかりやすい英語で世界のいろいろな国や地域の人達と対面でまた ICT を使ってしくコミュニケーションする。そのような英語使用につながってゆく、英語教育を小学校から大学に至るまで構築していくことが望まれているのではないだろうか。

参考文献

Brown, H. D. (2014). *Principles of language learning and teaching: A course in second language acquisition* (6th ed.). New York: Longman.

平泉渉, 渡部昇一 (1975). 「英語教育大論争」東京: 文芸春秋.

Lightbown, P. M., & Spada, N. (2013). *How languages are learned* (Fourth ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.

ミルクボーイ (2018). 「ミルクボーイ もなか 漫才」 <https://www.youtube.com/watch?v=z4k4URMBY3Q>

文部科学省 (2017). 「小学校学習指導要領」東京: Author.

Rose, H., & Galloway, N. (2019). *Global Englishes for language teaching*. Cambridge University Press: Cambridge.

Sasamoto, I. (2019). Why was Harry Potter so strong? The impact of study abroad on college students' perceptions of English. Unpublished Bachelor's Thesis at Doshisha Women's College of Liberal Arts. Kyoto: Japan.

鳥飼玖美子 (2018). 「英語教育の危機」東京: 筑摩書房.

若本夏美, 今井由美子, 大塚朝美, 杉森直樹 (2017). 「国際語としての英語」東京: 松柏社.

資料:

もなか (一人二役 中学生落語)

太郎君: うちのオカンが わからへんことがあるっていうねん。

Taro: My mom is having a problem. She has something she wants to remember, but she can't.

二郎君: 何がわからへんのよ。

Jiro: What can't your mom remember?

太郎君: 好きなお菓子があるらしいねんけど、そのお菓子の名前をちょっと忘れてたらしくてね。

Taro: She seems to have a favorite sweet, but she can't remember what it was.

二郎君: お菓子の名前忘れてたってどうなってんねん、それ。

Jiro: Can't she remember the name of the sweet? Really? Is she all right?

太郎君: いろいろ聞くねんけど全然わからへんねんな。

Taro: I offered several names of possible sweets, but they were wrong!

二郎君: オカンの好きなお菓子の名前、いっしょに考えてあげるから、どんな特徴があるか言ってみてよ。

Jiro: Okay, I will help you for her. Tell me its characteristics.

太郎君: 和菓子で、薄茶色のパリパリの皮でアンコをはさんだやつやて。

Taro: It's a Japanese sweet. It's light brown, like a sandwich with sweet bean jam in-between.

二郎君: モナカやないかい。その特徴は完全にモナカやがな。

Jiro: Easy! It must be Monaka. Absolutely Monaka. Those characteristics perfectly match the ones of Monaka.

太郎君：それがわからへんねんな。

Taro: However, she is not sure.

二郎君：何がわからへんのよ。

Jiro: What? What do you mean?

太郎君：オレもモナカやと思たんやけど、オカンが言うにはスーパーで子どもがそれ欲しくて泣いてたって言うねんや。

Taro: I also thought it was Monaka, but she says that the sweet she likes is what kids love, the one they cry for at the supermarket.

二郎君：ほなモナカと違うか。

モナカで子どもごねへんもんね。モナカあんなに甘いくせに子どもからは全く人気がないねんやから。もっと詳しく教えてくれる？

Jiro: Then, it is not Monaka. Kids are not interested in something extremely sweet like Monaka.

太郎君：食べたら皮が全部上あごにひつつくらしいねん。

Taro: It is ... when eating, it sticks to the mouth.

二郎君：モナカやないか。あれ全部上あごに持っていかれるねんから、皮とあんこのハーモニー感じたことないのよ。モナカに決まりや、そんなもん。

Jiro: Then, it should be Monaka. Monaka soaks up the water in the mouth. It must be Monaka. I don't feel like the crust and sweet bean jam fit together very well.

太郎君：わからへんねん。

Taro: But I am not sure.

二郎君：何がわからへんねん。

Jiro: Are you kidding me?

太郎君：俺もモナカと思ったんやけどオカンが言うには1個食べ出したら止まらへん言うねん。

Taro: I also thought it would be Monaka, but my mom says she can't stop eating once she starts.

二郎君：そんならモナカと違うやないか。モナカは一口食べたらすぐ止まんのよ。モナカ2個目いってるヤツ見たことないんやから。ほなモナカと違うやん。

もうちょっと何か言ってなかったか？

Jiro: Oh, no. Once you start eating, you can't keep eating it. You can't eat two Monakas in a row. Then, it is not Monaka. Did she say anything else?

太郎君：オカンが言うにはモナカではないと。

Taro: She says it isn't Monaka.

二郎くん：ほなモナカではないやないか。

Jiro: Idiot! If she says so, then it isn't Monaka in the first place.

太郎君：申し訳ない。

Taro: Sorry. I should have said earlier.

二郎君：ほんまにわからへんがな。どうなってんねや。

Jiro: We have no idea! Is there any solution for this?

太郎君：オトンが言うにはピザポテト違うかと。

Taro: My dad says it might be Pizza Potato.

二郎君：絶対違うやろ。

Jiro: They're unbelievable!

(ミルクボーイ原作 英訳 若本夏美)

注

- 1) スイスに本部のある国際語学教育機関 (EFエデュケーション・ファースト) はオンライン上で無料テストを実施し「英語能力指数」としてまとめている。英語を母語としない100カ国・地域で、日本の英語力は53位だったと発表している (朝日新聞、2019年11月12日)。
- 2) このゴタゴタは民間英語試験導入の顛末にも見られたことは記憶にも新しい (高校の現場の声を無視して導入を進めようとしたが、直前の2019年12月17日に萩生田光一文部科学相が見送りを表明した)。
- 3) <https://www.theguardian.com/politics/2020/feb/01/police-called-in-after-poster-tells-residents-of-flats-to-speak-english> [Visited, 2020, February 10].
- 4) 中学生用に英訳したものは資料参照のこと